

保安語(バオアング) 中 Bǎo'an,

露 баоаньский язык, 英, 独 Baoan, Baoan

【概況】 モンゴル語族に属する言語の1つ。中国の甘肅省、積石山保安族東郷族撒拉族自治县の保安族、および、青海省同仁県の土族の一部によって話される。話者数は、推定で総計1万人前後。独自の文字をもたず、書記には、漢字(中国語)を用いる。

民族名の保安(自称は, [baonaŋ]あるいは[bounaŋ])は、青海省同仁県の保安营および保安城に由来する。伝承によれば、保安族の先祖は、元来、保安地域に住んでいたモンゴル系住民のうちのイスラム教徒で、清朝同治年間の初め(1860年代)に、同地のラマ教領主の圧制を逃れて、甘肅省に移住してきたものである。

保安族の人口は、1982年の統計によると9,027人で、その大部分は、甘肅省臨夏回族自治州、積石山保安族東郷族撒拉族自治县の大河家公社の甘河灘、大墩、梅坡、および、それに隣接する劉集公社の高李に

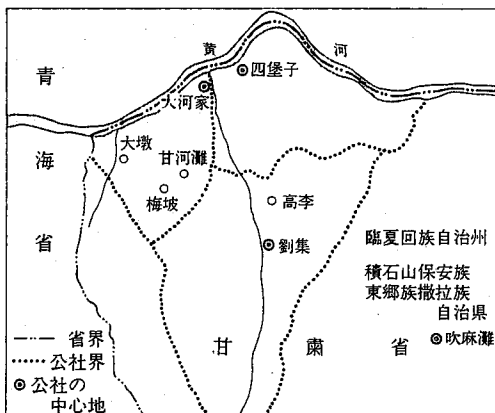
集中している(図1を参照)。保安族のうち、梅坡の住民はすでに保安語を話さず、中国語だけを使用しており、保安語の話者は、保安族の4分の3程度と推定される。また、学校教育は中国語で行なわれており、保安族の保安語話者のほとんどが、中国語との二重言語使用者である。宗教は、上述のように、イスラム教を信仰し、風俗や習慣は、回族のそれとほとんど変わらない。

一方、保安語を話す、もうひとつのグループは、青海省黄南藏族自治州内、同仁県の、年都乎、郭麻日、尕洒日、保安下庄等を中心に居住する3千~4千人の土族である(図2を参照)。彼らは、民族名として土族を自称しているが、その言語は、他の土族(青海省互助土族自治县や民和県の土族)の話す土族語(モンゴル語)とは通じず、保安語の方言である。これら、同仁県の土族は、チベット仏教(ラマ教)を信仰し、その風俗や習慣は、チベット族のそれに近い。同地の学校教育はチベット語で行なわれており、土族の保安語話者は、その大部分が、チベット語との二重言語使用者である。

この言語は、19世紀末に、ロシアの探検家ポターニン(Г. Н. Потанин)が、青海省保安城のモンゴル系住民の語彙を採集して、いわゆる「シロモンゴル・モンゴル語」の一部として紹介して以来、モンゴル高原のモンゴル語とは、一風変わった特徴をもつ言語として知られてきた。しかし、その後は、半世紀以上も調査が及ばず、言語の実態は長らく不明であった。

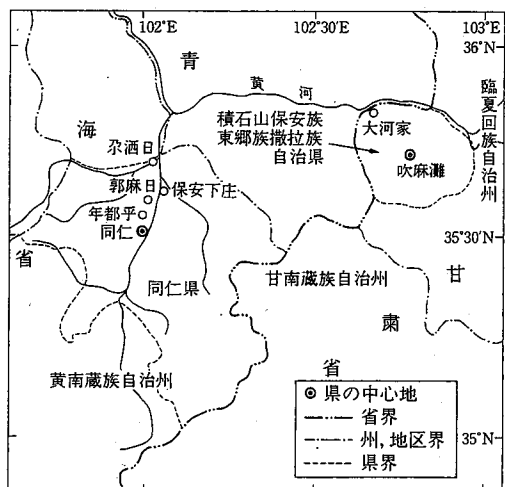
1955年と1956年に、中国科学院や中央民族学院等の主催で行なわれた中国少数民族の言語調査の結果、はじめて、保安語の音韻、文法体系、基本語彙の概要が明らかになり、これによって、保安語は、モンゴル(土族)語、東郷語、シラ・ユグル語とならんで、モ

〈図1〉 保安語域(甘肅省)



出典：『積石山保安族東郷族撒拉族自治县概況』(蘭州, 1987)による。

〈図2〉 保安語域(青海省)



ンゴル語族中の独立の言語として位置づけられることになった。当時の言語調査の資料をもとに、1960年代には、トダエワの論著(B. Ch. Todaeva 1963, B.X. Todaeva 1964)が、また、1980年代に入ってから、布和、陳乃雄(1981)、布和、劉照雄(1982)らによる概説が公刊されている。

さらに、1980年には、内蒙古大学蒙古語文研究所による、中国内モンゴル系諸言語の言語調査の一環として、保安語の組織的な調査が行なわれ、その成果は、語彙集(陳乃雄等編, 1986)、口語資料集(陳乃雄等編, 1987)、および、文法書(陳乃雄, 1987)といった本格的な資料、研究書として刊行された。

保安語は、大きく^{ダ-ホチヤ}大河家方言と^{トシジ}同仁方言の2方言に分けられる。大河家方言は、甘肅省積石山保安族東郷族撒拉族自治県の大河家公社を中心に居住する保安族によって話され、同仁方言は、青海省同仁県の土族によって話される。両者の言語的差異は比較的小さいが、大河家方言には中国語の影響が大きいものに対して、同仁方言にはチベット語の影響が著しい(後述)。

以下、本項の記述は、大河家方言に基づいた『保安語簡志』(布和、劉照雄, 1982)によるところが大きい。ちなみに、1980年の内蒙古大学の言語調査は、同仁方言を拠点に行なわれたものである。

【言語的特徴】 保安語は、従来よく知られている、ハルハ・モンゴル語や内蒙古語、カルムイク語、ブリヤート語等、主要なモンゴル語系の言語とは、外貌を著しく異にしている。これは、歴史的に、保安語が、独自に、大々的な改新をこころむったことが大きく影響している。

モンゴル語族の中で、保安語と、概して多くの類似的特徴をもつのは、モンゴル語と東郷語である。このため、これら3言語は、歴史的に緊密な関係にあったことが推定され、今後、これらが、ひとつの語派にまとめられる可能性は大きい。

全体的にみた保安語の音声的な特徴としては、次のような点を指摘することができる。

- 1) 強勢が、常に語末音節の母音におかれる。
- 2) 母音調和がない。
- 3) 母音の長短の違いが、音韻的対立をなさない(通例、第1音節の母音は、幾分長めに発音される)。

これらは、いずれも、保安語に生じた改新の結果、えられた特徴である。一方、保守的な特徴としては、以下のような点があげられる。

- 4) ハルハ・モンゴル語等の4つの円唇母音(o, u, ö, ü)に対して、2つの円唇母音(o, u)が対応している。

蒙古文語形	保安語
ol-	ol- 「得る」
köl	kol 「足」

qura	Gura	「雨」
kündü	kunte	「重い」

5) 語頭に、mb-, nd-, ŋg-, tx-, xdž-, ndž- 等の子音連続や、子音 r- が現われる。

6) 強勢が語末音節におかれることから、しばしば語頭音節の母音が脱落したり、語頭音節全体が消失する現象が観察される。

蒙古文語形	保安語
üsü(n)	suŋ 「毛」
kituɣa	dogə 「小刀」
üje-	ndžia- 「見る」
takiya	txa 「鷄」
ire-	rə- 「来る」

7) 13~14世紀の中世蒙古語でhとして現われ、現代のモンゴル諸語の多くで失われた語頭の摩擦喉音に対して、無声摩擦子音 f, h (まれに, š, x) が対応している。

この子音は、蒙古文語では表記されない。

蒙古文語形	中世蒙古語	保安語
ulaɣan	hula'an	fulaŋ 「赤い」
arba(n)	harban	harwaŋ 「10」
odu(n)	hodun	hotuŋ 「星」
ilegüü	hüle'ü	šilu 「余分な」

8) 名詞語幹末のいわゆる「不定のn」は、ハルハ・モンゴル語等の主格形では失われたが、保安語では、主格形の末でŋとして保持されていることが多い。「不定のn」は、名詞類の一群の語において、語幹末の子音nが、格変化の際に、一部の格で脱落する現象であり、モンゴル諸語に広く観察される。ハルハ・モンゴル語では、主格形のほか、対格、造格、共同格で、語幹末のnが脱落する。保安語では、このŋは、格変化に際して脱落しない。

amaŋ「口」、dabsuŋ「塩」、Gulesuŋ「竹」、など。

【音韻体系】 母音は、i, e, a, o, u, ə, および、y, əの8種類。oは、昇り二重母音[yə]のように発音されるが、他は、IPAの音価に近い。最後の2つは、主に中国語からの借用語中に現われる音で、yは前舌円唇狭母音、əは捲舌の中舌母音である。

yši (<玉石 yùshí), džia (<第2 dièr)

子音は、p, t, k; b, d, g, ɣ; m, n, ŋ; f, s, x, h; š, tš, dž; w, j; l, r; (š, tš, dž; ts, dz). カッコ内は、もっぱら借用語に現われる。これらのうち、š, tš, džは、IPA(1979年改訂版、以下同じ)の表記では、それぞれ[e, tɕ, tɕ]を、また、š, tš, džは、捲舌音の[s, tɕ, tɕ]を表わす。閉鎖(破裂)音と破擦音は、すべて無声音で、帯気音と無気音で対立している。これは、tense(張り)とlax(弛み)の対立と見なすこ

とができる。

無声帯気音(tense) p, t, k; tš (tš, ts)

無声無気音(lax) b, d, g, ɣ; dž (dž, dz)

[形態] 保安語は、他のモンゴル諸語と同様、形態的には膠着タイプに属する。すなわち、語形変化は、語幹にさまざまな接尾辞が接尾することによって行なわれ、そうした接尾辞の境界は明瞭である。保安語の接尾辞は、ほとんどの場合、異形態をもたず、単一の形式で現われる。

語幹は安定しているが、語幹末の母音əは、接尾辞が付く際に脱落することがある。

re「来る」+o(確定過去)→ro「来た」

これに加えて、若干の文法的な語形の消失や融合(syncretism)による変化が生じた結果、保安語の文法形態は、著しく単純化している。

名詞の文法的変化には、1) 複数変化、2) 格変化、3) 所属変化、があり、語幹に、それぞれ、次の語尾が付着することによって行なわれる。

1) 複数語尾 -lə.

例) šile「机」—šile-lə「机(pl.)」

2) 格語尾(5種)

主格	-φ(ゼロ)	šile	「机が」
属・対格	-nə	šile-nə	「机の/を」
与位格	-də	šile-də	「机に/で」
奪格	-sə	šile-sə	「机から/より」
造・連帯格	-galə	šile-galə	「机で/と」

3) 所属語尾 -nə(3人称の人称所属語尾のみ).

例) šile-nə「彼(女)の机」

格変化では、属格形と対格形が、さらに、造格形と連帯格形が融合しており、また、所属変化では、3人称の所属語尾だけしかなく、1人称、2人称の所属語尾、ならびに、再帰所属語尾を欠いていることが目立つ。

代名詞も、名詞と同様の格変化をするが、1人称と2人称の場合は、1) 語幹の交替があること、2) 対格形が属格形とでなく、与位格形と融合している点で、名詞の曲用とは異なる。さらに、注意すべきことは、1人称複数形の排除形(exclusive)と包括形(inclusive)の形が、蒙古文語やダグル語等の場合と、ちょうど逆になっていることである(〈表〉を参照)。

例) 蒙古文語 包括形—bida, bidan-u, ...,
排除形—ba, manu, ...

3人称の人称代名詞は、主格形が ndžaj(pl. ndžasə) および ŋgan(pl. ŋganlə) で、格変化は名詞と同様の語尾が付き、語幹の交替はない。

保安語では、数詞のうち、1~10 および 20 は固有の数詞を保持しており、30~90 を表わす語は独自の合成法によって改新をとげている。

「1」nəgə, 「2」guar, 「3」guraŋ,

〈表〉 人称代名詞の格変化

	(1人称)			(2人称)	
	単数	複数 排除形	複数 包括形	単数	複数
主格	bu	bədə	mangə	tši	ta
属格	mə-nə	bədə-nə	ma-nə	tšio-nə	ta-nə
与位・ 対格	na-də	bədan-də	man-də	tšio-də	tan-də
奪格	na-sə	bədan-sə	man-sə	tšio-sə	tan-sə
造・連 帯格	bə-galə	bədə- Galə	mangə- Galə	tši- Galə	ta-galə

「4」deraŋ, 「5」tawuŋ, 「6」džirguŋ,
「7」doluŋ, 「8」nəiməŋ, 「9」iəsuŋ,
「10」harwaŋ, 「20」xoruŋ

これに対して、

「30」gubaraŋ, 「40」deraraŋ, 「50」tawaraŋ,
「60」džirguraŋ, 「70」dolaraŋ, 「80」nəimaraŋ,
「90」iəsaraŋ, 「100」nəgandžəŋ

千以上は、中国語からの借用語を用いる。

「1,000」itšian, 「10,000」wan

動詞の活用では、語幹に、1) 命令類、2) 叙述類、3) 形動詞類、4) 副動詞類の、さまざまな語尾が接尾する。

1) 命令類には、聞き手に対する命令形(2人称の主語に呼応する)のほか、1人称の主語に呼応する意志形(「~しよう」)、3人称の主語に呼応する容認形(「~するがままにしておけ」)がある。

種類 語尾 例

命令	-φ(ゼロ)	kal	「話せ」
意志	-e	kal-e	「話そう」
容認	-gə	kal-gə	「話させておけ」

命令類の打ち消しには、活用形の前に禁止の副詞 təgə をおく。

təgə kal 「話すな」

təgə kale 「話さないようにしよう」

2) 叙述類は、時制を表わし、言い切りの形で文を終止する。叙述類には、文の内容を話者の経験ないしは主観的な判断として表現する「確定形」と、それを話者の裁量外の事実として表現する「非確定形」の、2種類の陳述様式がある。

種類 語尾 例

過去 確定形	-o	kal-o	「(確かに)話した」
非確定形	-tš	kal-tš	「話した」
現在 確定形	-(ə)m	kal-əm	「(確かに)話す」
非確定形	-nə	kal-nə	「話す」

これらの打ち消しには、過去形では活用形の前に否定の副詞 sə を、現在形では活用形の前に lə をおく。

sə kal-o 「話さなかった」

lə kal-nə 「話さない」

このほか、一部の形動詞形や副動詞形と、補助動詞 i, o が結びついた、次のような合成形も、叙述類と同じように用いられる。

種類	語尾	否定形
未来 確定形	-g-i(<-gu-i)	-gu-ši
	非確定形	-g-o(<-gu-o)
完了 確定形	-saŋ-wi	-saŋ-gi
	非確定形	-saŋ-wa
進行 確定形	-dži-i	-dži-gi
	非確定形	-dži-o

3) 形動詞類は、名詞類を修飾する形容詞的なはたらきと、「～する(した)こと」の意味をもって格変化する名詞的なはたらきをもつ。また、形動詞類は、述語として、他の語句を支配する動詞的なはたらきをも合わせもち、形容詞句や形容詞節、名詞句や名詞節をつくるはたらきをする。

種類 語尾 例

完了 -saŋ kal-saŋ 「話した～; 話したこと」

動作主 -tšon kal-tšon 「話す～; 話す人」

予定 -gu kal-gu 「話す～; 話すこと」

例をあげる。

kal-saŋ kuŋ 「話した人」

kal-gu-nə madə-nə 「話すことを知っている」

4) 副動詞類は、動詞、形容詞等を修飾する副詞的なはたらきと、述語として他の語句を支配する動詞的なはたらきを合わせもった形で、副詞句や副詞節の核となる。あるものは、等位節の述語となって文を中止し、他は、従属節の述語となって主文に連なる。

種類 語尾 例

連合 -aŋ kal-aŋ 「話し～」

並列 -dži kal-dži 「話して～」

条件 -sə kal-sə 「話せば～」

譲歩 -sədə kal-sədə 「話しても～」

即刻 -guma kal-guma 「話すまで」

限界 -təla kal-təla 「話すために」

目的 -lə kal-lə 「話すために」

動詞の態(voice)には、1) 使役態と、2) 共同態の2種があり、語幹に、次の接尾辞を付加する。

1) 使役態接尾辞 -gə-「～させる」

kal-「話す」— kal-gə-「話させる」

šine-「笑う」— šine-gə-「笑わせる」

2) 共同態接尾辞 -tši-「いっしょに～する」

kal-「話す」— kal-tši-「いっしょに話す」

legə-「働く」— legə-tši-「いっしょに働く」

受動態形成の接尾辞はない。

【統 辞】 語順で目立つのは、数詞や数量形容詞

(例: oloŋ 「多くの」) が、通例、それが修飾する名詞の後におかれることである。

šile nəgə 「1つの机」

机 1つ

kuŋ oloŋ 「おおぜいの人」

人 多くの

Gonə Guraŋ džoŋ 「300頭の羊」

羊 3 100

このほか、動詞の打ち消しを表わす場合、禁止や否定の副詞 təgə, sə, lə が動詞活用形の前におかれることはすでに述べた。

iu 「行け」— təgə iu 「行くな」

ro 「来た」(<rə-o) — sə ro 「来なかった」

他の語順は、日本語にきわめて近い。すなわち、従属的な修飾語句が、それを受ける被修飾語句の前におかれる。文は述語を中心に構成され、述語は、通例、文末に位置して、主語、目的語等を支配する。述語にかかる文成分の相互の順序は、比較的自由であるが、主語-目的語-述語動詞(SOV)の語順がもっとも一般的である。

冠詞、関係詞はなく、前置詞の代わりに、後置詞を用いる。名詞や形容詞に文法的な性や数の一致はなく、形容詞は語幹形のままで名詞類を修飾し、補語となる。形容詞や副詞に、比較級や最上級の語形変化はない。

baonanǰdzu-nə ŋgorə-lə iəsgə-saŋ doğa

保安族 の 鍛冶たちが 作った 小刀は

nardə xar-dži o.

有名 になっている

保安語は、話者が、叙述内容を、自己の経験内、熟知の範囲内と見なすか、それ以外の事実と見なすかによって、陳述に、2つのカテゴリーをもつ。動詞の叙述類のところで述べた、確定、非確定の区別もこれに含まれるほか、2つの補助動詞 i と o が、もっぱら、この陳述の機能を担っている。繫辞と存在の表現について、この関係を見ると、次のとおりである。

<繫 辞>	肯定形	否定形
	「～だ」	「～なのだ」
		「～でない」
確定形	i-	mbi-
非確定形	o	mba
<存 在>		否定形
	「～がある(いる)」	「～がない」

確定形 wi-

非確定形 wa

gi-

gine

(ハイフンの付いた形には、さらに動詞の活用語尾が付くこともある)

体験、熟知の範囲内の陳述を表わす補助動詞 i は、1人称の主語と多く用いられ、他方の o は、2・3人称の主語とともに用いられることが多いが、これをトダエフ

のように、動詞の人称語尾とみるのは当たらない。

bu baonaŋ kuŋ i.

私は 保安 人 です

「私は保安族です」

ndžaŋ baonaŋ kuŋ o.

彼は 保安 人 です

「彼は保安族です」

məne gaga-də uerə wi.

私の 兄に 妻が いる

「私の兄には妻がいる」

【語彙】 語彙の中では、中国語とチベット語からの借用語が重要な比重を占めている。さらに、イスラム教徒である保安族の言語には、宗教分野におけるアラビア語からの借用語がみられる。

gagə「兄」(<中国語 哥哥 gēge)

šia「夏」(<中国語 夏 xià)

matax「花」(<チベット語 me-tog)

man「菓」(<チベット語 sman)

gumber「墓」(<アラビア語)

【方言】 保安語の方言が甘粛省の保安族の話す大河家方言と、青海省同仁県の土族の用いる同仁方言に大別されることは、すでに述べた。両者の主要な相違点は、大河家方言が中国語の影響をより多く受け、これに対して、同仁方言にはチベット語の影響が大きいことに起因しており、借用語を中心にした語彙的相違、および、それに影響された音声的相違が観察される。

目立った音声的な差異としては、大河家方言のšに對して、同仁方言で x が対応している例がある。

大河家方言	同仁方言	
šile	xele	「机」
šine	xene	「新しい」
širou	xiro	「土」

【辞書】

陳乃雄等編(1986),『保安語詞彙』(蒙古語族語言方言研究叢書 011, 内蒙古人民出版社, 呼和浩特)——保安語と中国語との対訳語彙集で、見出し語は、連語も含めて5千余。保安語形は IPA に準拠した音声記号で表記され、配列の順序は、モンゴルの伝統的なアルファベットによっている。見出し語のうち、モンゴル系の単語には、それに対応する蒙古文語形が、また、借用語には、もとの言語の語形(主に、チベット語と中国語)が付されている。

【参考文献】

陳乃雄(1987),『保安語和蒙古語』(蒙古語族語言方言研究叢書 010, 内蒙古人民出版社, 呼和浩特)——保安語のもっとも詳しい文法概説書。概況, 音論, 形態論, 統語論, 語彙論からなり、巻末には、蒙古文

語形と保安語の各地の方言の文法形態素の対照一覧表を付載する。保安語の共時的な記述に加えて、随所で、蒙古文語形との比較対照が行なわれている。陳乃雄等編(1987),『保安語話語材料』(蒙古語族語言方言研究叢書 012)——日常会話, 民話, 伝説, および, 風俗と習慣についての語りを含む口語資料集。保安語を IPA の発音記号で表記し, 対応する蒙古文語形と中国語の訳を付す。

那森柏(1987),「保安語」『中国少数民族語言』(中央民族学院少数民族語言研究所編, 四川民族出版社, 成都)

布和, 劉照雄(1982),『保安語簡志』(中国少数民族語言簡志叢書, 民族出版社, 北京)

布和, 陳乃雄(1981),「同仁保安語概要」『民族語文』第2期(中国社会科学出版社, 北京)

Todaeva, B. Ch. (1963), "Einige Besonderheiten der Paoan-Sprache", *Acta Orientalia* XVI (Budapest)

Тодаева, Буляш Хойчиева (1964), *Баоаньский язык* (Наука, Москва)

【参 照】 モンゴル諸語, シロンゴル・モンゴル語 (栗林 均)